

チャラ男「うえ～い指揮官くん見てる～？」

畑渚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すべてはこのツイートから始まった

<https://twitter.com/hatanagisa9/status/1221480320879246540?s=20>

目次

チャラ男「うえ〜い指揮官くん見てる〜？」

1

チャラ男「うえ〜い指揮官くん見てる〜？」

「よし、キレイになったな」

手慣れた様子で、指揮官はメンテナンスを終えた銃を組み立てる。そして無駄に重々しい椅子に座り込み、タバコに火をつけた。

「もう、指揮官。またタバコ？」

「ん？ああすまん」

執務室に入ってきた副官の姿を見て、彼はタバコを口から離す。

「ああ、いいの。タバコ吸ってる姿は好きよ」

素晴らしいながらも、副官の彼女は何かを要求するように手を差し伸べてくる。その顔は少し怒りの混じった笑顔だった。

「はあ、お見通しってわけか」

指揮官はしぶしぶとタバコの箱をとりだす。それは、先程こっそりと買ってきたものだった。

「私だって指揮官の趣味をつぶしたくはないんだけど……」

彼女はそつと顔をそむける。

「早死はしてほしくないから」

「まったく、そんなこと言われちゃ控えるしかないな」

彼は素晴らしいながら、コート裏の隠しポケットからもタバコの箱を取り出した。

「stand up」

「えっ？」

「両手を壁について立ちなさい、指揮官？」

このあとむちやくちや身体検査されて、タバコを没収された。

二人の左手薬指には、同じデザインの指輪が煌めいていた。

「なあなあ、ちよいと身分証忘れただけじゃねえか。開けてくれねえ

の〜?」

保護区域へと続く検問所で、男はサングラスを上に入れてそう言った。

「身分証明〜?てきとうに基地内の人形に……ああん人間じゃないとダメ?」

「仕方ねえな……ああ、確か〇地区で指揮官やってるあいつがいたかな。顔でわかるはずだからさ〜」

男が取り出した写真には、その男の隣に誰かが映っていた。警備員は、その男の隣に立つ人物の顔を、つい先程まで見ていた。振り返って事務所を見れば、ちょうどニュースでその人物が映る。

「おっ、なにになに?あいつ英雄だなんて言われてるのか?」

テレビの音声を聞いてか、男は呆れたように鼻で笑う。

「それで、通っていいのか?」

警備員は迷った揚げ句、上に判断を委ねた。

||*||*||*||*||

『もうやめてくれ!』

『馬鹿が!』

『なっ……!』

『おまえのものは俺のもの。そうだろ』

「指揮官!もう、居眠りして」

「ああ、すまない」

指揮官は顔を振って意識をはっきりさせる。昼過ぎの執務で眠くなってしまったようだった。副官の淹れてくれた紅茶で目を覚ます。

「そんなんでこの後の会議、大丈夫なの？」

「問題ないさ。どうせいつもどおりだ」

「はあ、まったく」

副官の彼女は、書類の束を彼の机に置いた。

「これは？」

「さあ？IOPからよ」

「ああ、そういえば何件か頼み事をしてたかな」

指揮官はペラペラと書類をめくる。

「よし、それじゃあ会議の準備にとりかかろうか」

「もう終わってるわ。誰かさんが居眠り中にね」

「有能な副官を持って僕は幸せだよ」

「じゃあ私は不幸ね。指揮官がこんな人間で」

「ひどくないかい？」

移動中も、会話が途切れることはなかった。

会議室へと着けば、今回の部隊メンバーが彼らを迎え入れる。

「さて、今回の作戦だが——」

普段どおりに、指揮官は会議を進める。何の不備もない、完璧と言ってもよいほどの作戦だった。

「——以上だ。何か意見があるものは？」

誰も声をあげない。彼女らも、彼とその作戦を信頼していた。

しかし、副官だけはそうではなかった。一時解散後に、指揮官に話しかける。

「もう1部隊、動かせないかしら」

「……捻出はできると思うが」

「ならいいわ。無理しなくても」

「戦力が足りないのかい？」

「いいえ、これだけあれば十分よ。いくら新人たちとはいえ、戦術人形だもの」

彼女も装備を整えながら、そう言った。他の人形たちも出撃準備を終え、ヘリポートへと集合する。

「それじゃあ行ってくるわ」
「ああ、いつてらっしゃい」

副官の出撃を見送りながら、男はタバコに火を着けた。

※※※※※※※※

「状況は！」

司令室に、彼の怒号が響く。

『わからない！増援!?新しい勢力!』

副官からの通信は、銃声で聞こえづらかった。

「ちくしょう！」

マップに書き込まれた線は、まるで絶望の二文字を表しているかのようだ。

「まだ、なにか策が！」

考えれば考えるほど、状況が最悪であることを再認識させられる。もはや、損害なしでは切り抜けることは不可能であった。

「こちらも増援だ、増援を送る！耐えてくれ！」

『持たない!……あなたたちは逃げなさい』

「待て!何をする気だ!」

『私がここに残るわ。大丈夫、バックアップはとってるから』

「そういう問題じゃ！」

『これが最善よ。なに、少し帰りが遅れるだけよ』

通信は一方的に切られる。部隊の位置を示すマークが、動き始めた。一直線に、唯一の脱出可能ポイントを目指して。

※※※※※※※※

指揮官はタバコを啜えると、火も着けずに椅子へと座り込む。そし

てそのまま、天井を見上げる。

その日は、仕事を急かしてくる副官がいなかった。

彼はタバコを灰皿へと投げると、書類をめくり始める。しばらくノロノロと仕事をして、そして立ち上がる。

「くそっ！」

壁に手を打ち付ける。まるで生を実感させるように、打ち付けた拳がじわじわと痛む。

「あのとき、俺が部隊を捻出さえていれば……！」

そのとき、ピラリと一枚の書類が机から滑り落ちる。

それを拾い、軽く目を通す。

それは、副官のメンタルモデル再構築の失敗報告書だった。

目を見開き、彼は詳細へと目を通す。

「エラー？活動中人形のメンタル再構築は不可能……？」

そこには、副官がいまだに生きているという、救いのようで残酷な報告があった。活動中である限り、彼女はバックアップによる復元が不可能である。彼女の帰りは、さらに遅くなってしまう。

ピコン

もう今日何本目かわからないタバコを口に啜えこんだ瞬間、指揮官の端末から着信音になる。

そのビデオ通話の着信元は、見覚えのない番号からであった。普段なら拒否するはずだったが、指揮官はどうしてか、今回だけはその着信を受け取った。

|| * || * || * || * ||

「うえ〜い指揮官くん、見てる〜？」

着信元は、見覚えのある男からだった。その軽薄そうな男は、指揮官の顔を見てケタケタと笑っていた。

「おまえ……！もしや……！」

「君の大切にしてた人形ちゃん、いま俺の隣で寝てるよ」

彼はカメラを移動させる。そこには、彼の副官が横になっていた。服はボロボロで、体にはいくつもの傷が刻み込まれていた。

「そんな……馬鹿な……」

「その顔が見たかったぜ」

男は愉快そうにケタケタと笑う。

「あれ……指揮官……？わ、私……」

「無事なのか！」

「指揮官……ごめんなさい私……」

「君が謝る必要はない。僕の責任だ……」

その様子を見て、男は明らかに不機嫌そうな顔を浮かべた。

「おいおい、なんで俺をほったらかして二人でくつちやべってるわけ？」

男が副官の彼女を睨みつける。

「ひっ……」

「なくんでいまさら怖がつてるのかな？」

「やめて……もうコレ以上は」

「おいおい、冗談はやめろよ……！」

いびつにも見える笑顔を、男は彼女へと向ける。

「ひっ……！」

「まったく……。おい指揮官くん、おまえなんて教育してるんだよ」

「……」

指揮官は顔をうつむける。顔に影がかかり、表情が読めなくなる。

「まったく、手のかかるやつらだ」

「そこから動くな。もう……、動かなくていい」

呆れて首を横に振る男に、指揮官はそう絞り出すように言葉を紡いだ。

「何言ってるんだよ。おまえに俺の行動を縛る権利はねえよ？」

「部隊を送る。おまえはそこで回収する」

「はく？おまえさく状況がわかってんのか？」

「わかってるさ」

「わかってないだろ？おまえここがどこだかわかってんのか？」
男は手を頭にやり、はあ、とわざとらしく大きなため息をつく。

「ここは鉄血の拠点のど真ん中だぞ」

「もう喋らないで！あなた腕が吹き飛んでいるのにどうして笑ってられるのよー！」

「へへ、俺なんかを心配してくれるなんて……いい女じゃねえか」

「馬鹿なこといってないではやく傷を見せなさいよ！」

ファーストエイドキットをとりだそうとする手を、男は無事な方の手で止めた。

「やめろ。俺はどうせ終わりだ」

「指揮官！」

「……」

「どうしてどうして何も言ってくれないのよ……」

すがりつくように指揮官に声をかけるも、カメラはすでに切断され

ていた。

「親友なんでしょ！」

「そうだ」

「だったら」

「俺にだって不可能はある」

残酷にも、暗転した画面からは非情な声が聞こえる。

「へへ、わかってんじゃないか。俺はもうたすからねえ。血を流しすぎた」

「どこかに血液パックが……！」

「わからねえのか！ようやく隠れられたんだ。ここから動くな」

辺りを見回す彼女の腕を、男は力強く握る。

「そんな……どうして私のために……」

「馬鹿野郎。おまえがいなきやあいつが悲しむだろ」

まるであたりまえかのように、男はそう答えた。

「私には替わりがあるのに……」

「その指輪にも替えはあるのか？」

その言葉に、彼女は目を見開く。

「大事に……、しろよな……」

「ちよつと！」

「少し……、眠く……」

男の目の焦点が、だんだんと合わなくなっていく。しかし、彼女を止めるための力だけは、弱まらなかった。

「っ！爆風!？」

しかし、突如の爆風が彼の意識を叩き起こした。

「なんだよ……、早いじゃねえか」

「敵……?」

「くそっ、寝てる場合じゃねえってか！」

男は飛び起きると、器用に片手で銃を構える。

「あなたこれ以上動いたら本当に死ぬわよ！」

「なに、こんな美女の側で死ぬるなら本望さ」
へへっと笑い、敵を向かい撃つべく彼は引き金に指をかけた。

「なら残念だ。その望みは叶わないからな」

副官専用の通信端末から、そう声がした。

突如、銃声がさらに大きくなる。それは、着実に男たちの方へと向かってきていた。

「指揮官！」

彼らの目の前に現れたのは、ボディアーマーを着用した指揮官の率いる精鋭部隊だった。

「ちっ、その装備。懐かしいじゃねえか」

「おっと、なに突然バランス崩してるんだ。ほら、肩貸してやるから立て」

膝から力の抜けた男を、指揮官はがっしりと掴む。

「くそ……かつこいいなまったく。敵わねえや」

「なにアホなこと言ってるんだ。ほら、帰るぞ」

「どうせ満身創痍だ。置いていってくれ」

「あまりガタガタ抜かしていると舌を引き抜くぞ」

「へへ、こわいこわい。まったく黙っていれば寡黙なヒーローだつてのに」

「ヒーロー？笑わせる」

男の言葉を、指揮官は鼻で笑った。

『もうやめてくれ！』

『馬鹿が！』

『なっ……！』

『おまえのものは俺のもの。そうだろ』

『だからってそんな……大人相手に喧嘩売ってボロボロになってまで……』

『おまえにとって大事なら、それは俺にとってだって大事なものだ。そうだろう?』

「いつだって俺の大事な物を守ってくれるのはおまえじゃないか。おまえこそが、ヒーローだよ」

||*||*||*||*||

静寂の支配する中、男はとある墓石に花束を供える。

「ごめんな……、おまえを救えなくて」

しばらく目を瞑り口を閉じたあと、彼は笑う。

「でも、今度は救えたぜ」

彼は首元からドッグタグをとりだす。そこには、指輪が通してあった。陽の光を鈍く反射して、キラリと光った。

「それは良かったですね」

男は目を見開く。

「前の私も、きつと喜んでいましたよ」

後ろから近づいてくる気配を感じながらも、男は動けずにいた。

「シラユキゲシ……私に供えるには良い花ですね」

「なぜおまえがここに……」

「私は人形ですわ。バックアップからある程度の復元は可能ですよ。完全とは言えませんが」

「違う、俺が聞いているのは、どうして俺を知ってる個体が生きてるのかだ」

「ああ、知らされていなかったのですね」

彼女は納得したかのようにうなずく。

「私の破片を、彼の部隊が拾いに来てくれたのですよ。そしてIOPに私費を投じて復元のための研究も彼が。ああ、彼と言うのは――」

「いや、言わなくていい。わかってる」

男は彼女の言葉を遮った。

「まったく……敵わねえや」

サングラスをかけて、男は車へと乗り込んだ。久しく使われていなかった助手席に、彼女を乗せて。